

前号から、「PBL教育支援プログラム」採択課題の成果報告をシリーズにて掲載しています。
第2弾は教育学部、南学先生の「PBLセミナーF:心の法則発見」における実践報告です。

2011年度開講「PBL教育支援プログラム」成果報告(2)

「心の法則発見」

導入した科目の概要

PBLセミナーFは、共通教育統合教育科目の1つであり、文字通りPBL的な手法を用いた授業で、とくに本科目はサブタイトルにある「心の法則」を発見し、自ら検証することを目的とした授業です。

学生の到達目標

大きくは、1)人間の心の働きについて注意深く観察を行い、そこに横たわる法則性に気づくこと。2)その法則性を自ら検証する方法を小グループで協力して考え、実施すること。3)得られた知見をわかりやすく伝えること。の3つを目標としました。

PBLを導入した意図・目的

実際に問題を考え、データをとり実証するという心理学研究のプロセスの中に、観察する、文献を調べる、現象について多角的に考える、被験者の観点からデータ収集について考える、考察を深めるなどの他専攻学生にとっても有意義なさまざまな学習経験の機会があると考えたため。

心理学専攻でよくおこなわれるグループで研究テーマを見つけ、自ら文献を調べたりしながら研究をおこなう手法がPBLの要件に合致するため、緻密な心理学研究法や統計的分析法などの専門性の要求を省いた形で、他専攻も含めた1年次生向けの授業としてアレンジをしています。

内容

(ステップ1:アイスブレイキング)

ここでは、今後のグループ活動を円滑かつ効率的におこなうために、お互いに打ち解けることを目指して、ロールプレイ型の他己紹介ゲームをおこないました。

ゲームを通じて、メンバーは自分が他者にどう見られているのかを知り、実際はどうであるかを紹介することで、自然と打ち解けることができました。

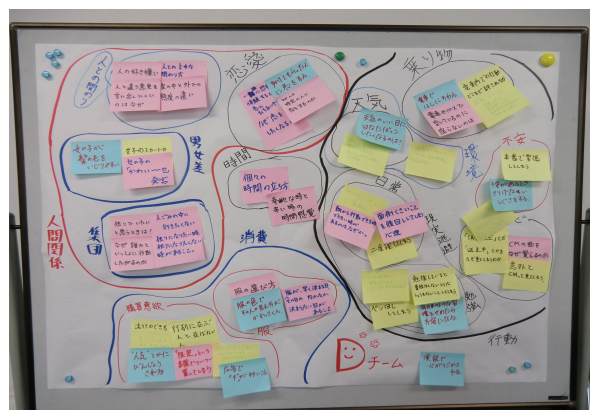
次に、グループで決定をおこなわせる課題をおこないました。この課題を通して、メンバーが意見をきちんと出し合えば、よりよい決定となるという経験を体感的に得ることができたと思います。

(ステップ2:テーマの探索)

自習タイムの各自の文献検索とPBLタイムのグループでの意見交換を繰り返す中で、自身の関心や探究したいテーマを明確にさせました。

(ステップ3:アイディアの収束)

KJ法を用いて、クラス全体で関心があるテーマの収束をおこないました。この過程を通して、似たような興味をもったメンバー同士でグループを編成できるようになりました。



(ステップ4:テーマの明確化)

グループ内で相互に興味がある心的事象について、文献検索や友人からの聞き取りなどを通して、理解と問題意識を明確にしていきました。

この段階では、教員とTAは理解を深めるような課題をそれぞれに与え、それを調べてくことで問題意識を絞り込めるような助言をおこないました。また、この段階で中間発表会を設けることで、受講生の目標への意識付けをおこないました。

(ステップ5: 検証仮説の明確化)

実際に検証する仮説を絞り込み、どのようにすればそれが実証できるかの方法を模索しました。この段階では教員とTAは専門的見地からの助言や提案をおこないました。

(ステップ6: 検証の実施)

受講生は質問紙法や実験法を用いて、仮説を検証することを目指し、データの収集をおこないました。その後、データの集計をおこない、得られた結果が仮説通りであるのか、また予想外の結果が得られていないかなどについて、協力しながらまとめていきました。

(ステップ7: 結果の発表)

まとめられた結果を、筋道たてて、かつ効果的に発表できるよう、クラス内での最終報告会をおこない、教員とTAは内容やプレゼン方法に対する助言をおこないました。最後は、心理学系のPBL3クラス合同の発表会を開きました。

成果

各グループともユニークなテーマと仮説を設け、データの集計とまとめに努め、他専攻の1年次生にはかなりレベルの高い発表ができたと思います。とくに合同発表会に参加したグループは、路上にあるタイルや縁石の上をつい歩いてしまうのはなぜかというたいへんユニークな事象に着目し、実際に学内や小学校前で実験をおこなうという実行力も発揮しました。

今後の課題

教員の方針として、できるかぎりグループの関心を尊重し、必ずしもアカデミックな研究が蓄積されていない研究テーマも推奨しましたが、その分教員は専門的な見地からの指導や助言が難しくなり、本来ならもっと高められたグループもあったのかもしれません。今後、もう少しはじめから領域を絞り込むのか、受講生の希望を認めるのかについて検討の余地があると思います。

また、15回で1年次生にテーマの設定からデータ集計、発表までを課すこと自体に無理があるのかもしれません。学生たちの可能性を信じて続けてみたいと思います。

教育学部 南 学

全学FDのご案内

広報・入試・カリキュラム改革の結果の分析をしていますか —入試フォローアップシステムを使った事例の紹介—

講師: 飯田和生氏

(HEDC入学者選抜方法研究部門長、
工学研究科教授)

日時: 2011年12月16日(金) 17:00~19:00

場所: 共通教育校舎1号館2階 PBL演習室1

主催: 高等教育創造開発センター、教務委員会、
入学者選抜方法研究委員会

内容: 入試フォローアップシステムは、どこから受験生が何人来て、どんな入試成績で、入学後にどんな成績であったのかを、受験生・学生を特定できない形で分析できるシステムです。

工学部を例として挙げながら、広報、入試、カリキュラム改革を検討する際に必要となる分析データを紹介します。

